

はじめに

公立千歳科学技術大学
理事長・学長 宮永喜一

令和5年の3月頃より、新型コロナウイルス感染症の影響も、少しずつですが、和らいできました。大学の各行事や生活・環境も元に戻りつつあります。5月における、感染症の5類相当への移行に伴い、本学では、この感染症に係わる行動指針も解除され、講義や実験などの授業は、元の形式に戻っております。ただ、過去の3年間で得られたいろいろな経験より、オンラインと対面型の双方の特徴をとり入れた、ブレンド型の授業の構築も、現在進行形で進められており、今後も、新しい形式の授業が導入されるものと感じております。

令和5年度の入学式は、4月4日に挙げていたしました。保護者の方には、多少の人数制限をさせて頂きましたが、ほぼ従来の形式での開催となり、やっと「通常」の環境が、戻ってきた感じがいたしました。

国内外では、アフターコロナの環境の下、デジタルトランスフォーメーション(DX)や、グリーントランスフォーメーション(GX)のキーワードが大きく話題になり、デジタル技術の涵養や、環境重視の経済社会システム構築などが、強く進められるようになりました。その中で、次世代半導体産業の復興という形で、日本政府主導の最先端半導体技術を取り扱うラピダスという会社が生まれ、その事業が千歳で展開されることとなりました。その場所は、本学の隣であり、今後、このラピダス社の事業展開などが、良い意味で、本学に大きな影響を与えるものと考えております。本学が主に担当する教育研究の分野は、応用化学生物、電子光工学、情報システム工学の各分野ですが、そのどの領域も、今回の次世代半導体の開発や事業化に深くかかわっており、人材育成や共同研究・開発などの様々なレベルで、非常に大きく、すばらしい効果が得られるものと感じています。

1980年代の半導体というのは、応用化学や電子工学などが重要とされてきましたが、今の次世代半導体とは、ビッグデータの解析や、人工知能の活用なども重要で、様々な分野の人材が必要とされています。このような環境は、次世代半導体に限らず、最先端の技術開発を行う企業や研究所では、当たり前の状況になってきており、次のイノベーションを実現するためには、異分野領域の知識習得と活用が必須となっています。本学では、異分野連携の教育研究を重視しており、例えば、理工学部教育では、一昨年より始まった、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」の全学教育プログラムに加え、新たに「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(応用基礎レベル)」も、文部科学省に認定され、学部3年生・4年生に対して、相応する科目が実施されております。また、大学院では、1つの理工学研究科・理工学専攻の中で、様々な研究分野が連携・融合して、新しい学問を学べるような環境づくりを進めており、さらに大学院担当教員の配置も、新たに実施しています。

本学を取り巻く環境や状況は、以前に戻るという以上に、大きく好転し、多様性のある内容で、新しい教育・研究活動が推進・加速されるものと感じています。今後も教職員一丸となって教育、研究、地域貢献に邁進してまいりますので、忌憚のないご意見、ご助言をいただければ幸いです。